● きこえの役割 ●

耳は、ことば、周囲の音、音楽など様々な情報を常に受け入れる窓口です。

例えば、ことばを聞き取り、やりとりするなどコミュニケーションに利用します。また、車のクラクションで危険を回避したり、雨の音で洗濯物を取り込むなど環境を察知して対応します。さらに話し口調や声色など、聴覚を使って相手の気持ちを判断しています。

子どもは、周りのことばを繰り返し聞いて覚えていきます。耳がきこえにくいと、ことばの発達が遅れたり、発音が不明瞭になります。また、周囲の物音が聞えないと起こっていることがわからず不安になったり、人との関わりを避けてしまったりと、情緒や行動にも影響がでます。

言語聴覚士がお手伝いします

ことばの遅れ
聴覚障害
構音（発音）障害
吃音
失語症
高次脳機能障害
音声障害
摂食・嚥下障害
など

『話す・聞く・食べる』ことに
問題がある方やご家族の支援をいたします

福岡県言語聴覚士会

事務局

TEL.080- 1776-5108

http://homepage3.nifty.com/fukuoka-st/

きこえ

＊子ども編＊

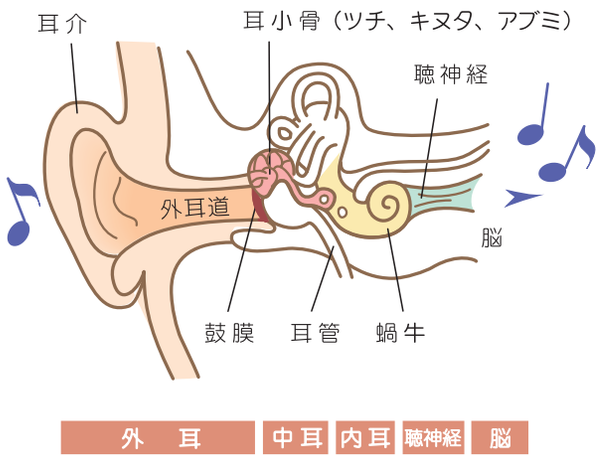
● 気になることチェックリスト ●

- ☐ 名前を呼んでも振り向かないことがある。
- ☐ 中耳炎になりやすい。
- ☐ テレビの音量を上げたり、スピーカーに耳を当てて聞く。
- ☐ 周囲の物音に気付かないことがある。
- ☐ なかなかことばがでない。

きこえについて

きこえにくい状態のことを『難聴（聴覚障害）』といいます。

■ きこえの仕組み



■ 難聴の種類

『伝音性難聴』

外耳道～耳小骨までが障害されると、音が小さく聞えます。

『感音性難聴』

蝸牛～神経・脳に至るところが障害されると、音が小さいだけでなく、歪んで聞えます。

■ 難聴の原因

生まれた時から聞えにくい『先天性難聴』と、生まれた時は聞えていたが、何らかの原因（中耳炎、髄膜炎、おたふく風邪など）で聞えにくくなる『後天性難聴』があります。中耳炎によりきこえが悪くなった場合は、中耳炎の治療により、きこえも回復します。

きこえの検査について

どれぐらいの大きさの音が聞えているか調べるために、きこえの検査（聴力検査）を行ないます。新生児から年齢に応じて様々な検査ができます。きこえの程度は、ことばの発達に影響することもあるので、まずは聴力検査をしましょう。

また、おうちでの情報がとても大切です。日常生活で子どもの音に対する反応（表情が変わる、泣き出す、振り向くなど）をよく観察してみましょう。

『幼児からできる聴力検査の例』

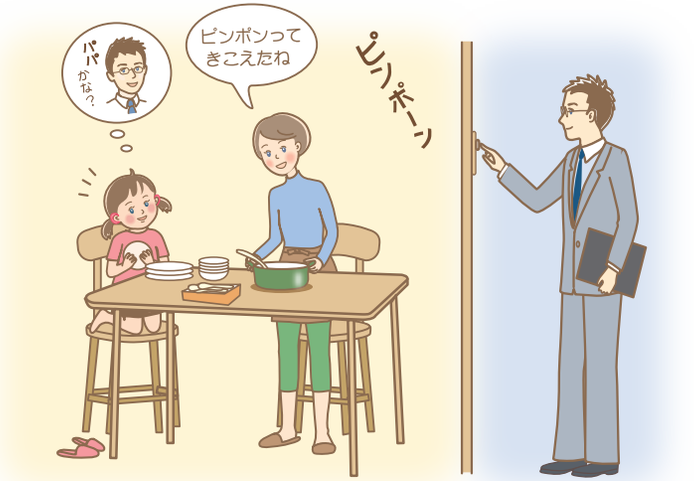
人の話し声が聞きとれないくらいの難聴がある場合、きこえを補う手段として補聴器や人工内耳（＊）があります。ただし、メガネと異なり、補聴器をつけたからといって、すぐにことばがわかるようになるわけではありません。（＊人工内耳とは、手術により電極を内耳に埋め込むことで、きこえを補う方法です。）

ことばの学習

「耳がきこえないから話せない。やりとりができない」ということはありません。きこえの程度や、こどもの発達の状態、環境により、いろいろなコミュニケーションの方法（実物、絵、写真、ことば、身ぶり）があります。どの方法がこどもにとって理解し、表現しやすいのかを判断していきます。

ことばの訓練では、毎日の生活で身の回りのものや生活体験を、ことばと結びつけてイメージする力を育てます。また、楽しい活動と音を結びつけて、音を聞きたい気持ちを育てます。わかったことや感じたことを人と伝え合い、豊かなコミュニケーションができるよう促していきます。

このように、ことばを聞く力、意味を理解する力、人とやりとりする力、自分を表現する力を育てていきます。難聴児専門の通園施設もあり、言語聴覚士、保育士、心理士が対応しています。



玄関のチャイムを父が押す。ピンポンと音が鳴る。室内で母と子が聞えたね、パパだねと顔を見合わせている。このように 音の意味を学習します。